

この度の東北地方太平洋沖地震等により被災された皆さまには心よりお見舞い申し上げますとともに、被災地の皆さまのご無事と一日も早い復興をお祈り申し上げます。

ふれあい

第139号

平成23年3月

青森県立中央病院



巻頭言

中央診療部門って、何？

中央診療部門長 立花 直樹



病院にとって無くてはならないものは何でしょうか。内科、外科、脳外科、整形外科、小児科、産婦人科、その他いろいろな診療科でしょうか。確かにこれらが無くては患者さんの診療はできませんね。

でも、これだけでは病院としての機能は果たせません。例えば診察を終え、薬が処方された患者さんは薬局がなければ薬を出してもらえません。肺炎の疑いのある患者さんは、X線写真やCTを撮らないと病変の様子が詳しくわかりませんが、放射線部が無いとX線写真・CTが撮れません。貧血の疑いがある患者さんは血液検査をしないと貧血の種類や程度がわかりませんが、臨床検査部が無いと血液検査ができません。入院した患者さんに食事が出なければ、治る病気も治らないでしょう。手術を受ける患者さんは自分が“がん”かどうか心配です。最終的には病理診断で決定しますが、病理部が無いと検査が出来ません。

このように、病院内には診療を支える多くの部門があります。これが“中央診療部門”と言われる所です。現在11の部署があります。それぞれの部署には高度な専門知識・技術をもった多くのスタッフがいて、日夜（職種によっては夜勤する人もいますから、本当に日夜です）働いています。これらの部署が一つでも動かないと、その瞬間から病院の機能はストップしてしまいます。まさに病院を支える屋台骨、縁の

下の力持ちと言われる所以です。

当院を受診した患者さんに一番多く接するのは誰でしょうか？恐らく看護師さんでしょうね。次に医師。それに比べると中央診療部門で働くスタッフ達の多くは患者さんの目に入らないところで仕事をしています。一部には患者さんと直接向かい合う職種もあります。例えばX線写真を撮る放射線技師、超音波検査を行う臨床検査技師、医療費のことや患者さんや家族のいろいろな悩みの相談にのる看護師などです。

その他のスタッフは患者さんからは見えない所で皆黙々と仕事をしています。手術室で手術の準備をしてくれる看護師や助手、手術に備えて輸血の準備をする輸血部技師、人工呼吸器や他の色々な医療器械が正常に動くように常に整備し管理している臨床工学技士、美味しい給食を作っている栄養士・調理師などです。

皆に共通していることは、患者さんが1日でも早く元気になるように、手術がうまくいくように、病気が正確に診断できるように、薬を間違いなく上手に飲んでもらえるようにと、それぞれの立場で患者さんのことを考えながら県病の医療に貢献しようという高い意識を持っていることです。

チームプレーという言葉がありますが、病院で行われる医療は、まさしくチームプレーの代表と言えるでしょう。その中のたった一つの部門でも働かなくなると、それだけで“病院というチーム”は機能停止状態になってしまいます。常に良いチームワークを保ちながら、患者さんのために安全で適切な医療を提供することを使命として、中央診療部門のスタッフは日々努力奮闘しています。

がんばっています！“NST”

NST事務局 栄養管理部

皆さん、栄養のこと大切に考えていますか？

栄養状態が悪くなると病気の治りが遅れたり悪化したりして入院期間が延びる原因ともなります。近年、医療現場における栄養管理の重要性が見直しされ、医師、看護師、栄養士、薬剤師、検査技師、言語聴覚士などから構成されるNST（栄養サポートチーム）の活動が全国的に広がり、日々、スタッフが力をあわせて栄養管理の問題に取り組んでいます。

当院のNST活動は平成20年4月から全科を対象としてスタートし、事務局は栄養管理部に置かれています。

NST活動では各職種の専門性だけでなく、栄養に関する共通の知識も必要とされます。このため院内研修会も開催しています。スタッフは各種研修会への参加などで新しい知識や技術の修得に努めており、昨年は日本静脈経腸栄養学会が認定するNST専門療法士試験に看護師の赤平敦子、穴水恵理子、臨床検査技師の工藤真理子、管理栄養士の蝦名悦子の4名が初挑戦し全員が合格しました。

現在、この4人を中心にスタッフが定期的に集まって検査データや食事の摂取状況、体重減少率などから低栄養患者を抽出したり、病棟からの依頼を受けてカンファレンスを実施し、その後チームで回診して適切な栄養療法（エネルギーや栄養の投与方法）の検討、提案をしています。

主な介入事例として褥瘡や嚥下障害による問題などがあります。低栄養との関連が深い褥瘡については、褥瘡対策チームと協力して蛋白質や微量栄養素の強化などを提案し早期治癒、改善への効果を上げています。嚥下障害については、平成21年末から摂食・嚥下評価や訓練指導に関する活動も行うようになりました。その他、様々な病態のケースがありますが、腸疾患による吸収障害のために食事が制限され特殊な栄養剤を経鼻から注入しなければならないケースなどでは、栄養剤を経口摂取できるように工夫するなど口から食べる楽しみやQOL向上の後押しにも努めています。

NSTスタッフ一同、少しでも皆様のお役に立てることを願っています。栄養のことで気になることがあれば、気軽にお尋ね下さい。



県病の思い出

病院局長 成田 正行



2年前に病院局へ出向となり、県病勤務となりました。以前から県病の存在は知っていましたが、建物の中で過ごすのは初めてでした。何と人が多いのでしょうか。玄関ホールや外来ホールなどは人でごった返しています。考えてみると、入院患者さんが600人、外来患者さんが1日1,400人、また職員では、医師が臨床研修医も含めると150人、看護師が550人、医療技術員が120人、事務系が45人のほか、非常勤職員も含めると1,000人を大きく超えます。このほか売店や食堂の共済会職員や、受付、警備を始めとした委託職員もあり、患者、職員等合計すると、この県病には何と3千数百人が出入りしているのです。まるでちょっとした町そのものです。迷子になりそうと思いつつながら、まずは暮らせるよう、トイレと食堂、売店だけは覚えました。

あれから2年が経ちました。病棟のセンター化に続いて外来のセンター化も進められています。外では新救命救急センターが完成し、ドクターヘリのヘリポートに加えて格納庫も完成し、色々と様変わりしていきっています。

しかし、病院の中を見ても、従来にも増して患者さんやそのご家族で人が溢れています。県病には苦情も寄せられますが、やはり県病なのです。県内各地から多くの患者さんに来ていただいているのです。それは何と言っても、高度な医療を提供するとともに、各職種の職員やボランティアの方々もそれぞれの役割を果たしながら、患者さんのために力を合せているからに違いありません。

平成23年度からは、県病の新たな進化を目指した「県立病院新成長プラン」に取り組むわけですが、患者さん中心の心あたかな病院へと更に発展されるよう期待しています。

退職にあたって

薬剤部長 角田 恵司



昭和49年に採用され37年間勤務してまいりましたが、この3月で退職することになりました。この間、平成3～4年に五所川原保健所勤務がありましたが、大半は県病一筋の生活で、長きにわたり大過なく勤務できましたのは皆様のご支援があったからこそと心よりお礼申し上げます。

これまでを振り返ってみますと、薬剤部業務は調剤主体から外来処方院外全面発行に伴い、入院患者さんに対する薬剤管理指導業務や個々の患者さんへの注射薬のセット化、抗がん剤のミキシング業務、TDM業務、ICTや緩和ケアチーム等への参画、治験に関する業務等々と多岐にわたり大きく変化してきております。

また、私にとって忘れられないのが、平成7年1月に発生した阪神・淡路大震災における救護活動のため、青森県で組織した医療チームの第1班として神戸市に派遣された時のことです。建物の倒壊など被災地の悲惨な状況は、これまで経験したことがない想像を絶するものでした。特に水の問題は深刻で、飲み水はもちろん、食べ物を煮炊きしたり、水洗トイレに流したり、汚れ物を洗うために一日も欠かせない水、日常何気なく使用している水道水のありがたさを改めて感じさせられたものでした。

さて、いよいよ平成24年4月には6年制薬学教育を受けた薬剤師が誕生します。チーム医療の一員として、薬物療法を通して医療の質の向上と安全確保のために患者さんにも他の医療スタッフにも「顔の見える薬剤師」として積極的に業務に取り組んでいってほしいと思います。

最後になりますが、県病の今後益々のご発展とスタッフ皆様方のご健勝を祈念いたします。

井戸を掘ってみました

栄養管理部技師長 木村 滋子



平成19年4月、地域保健（保健所）から異動となり、当時の栄養管理部長である安保副院長から「NSTをやってください」と言われ、「はい!」とは言ったものの「何じゃ、この日本語は?」という感じでした。前任者に「できるわけがないよ!」と一蹴されると、「やってみないとわからないでしょ!」と口から出ていました。

さあ、それからが大変。うっすら覚えのあるNSTなるものをまず理解せねばと情報収集。NSTの必要性を唱えている木村看護師に紹介されて八戸市民病院を見学。プロジェクトの立ち上げ、体制整備、試行、実施へと線路が見えました。ただし、病院機能評価V6の審査時には稼働していなければいけないという期限付き!

それまで、栄養士は給食管理が主業務で、栄養指導がその次、入院患者の栄養管理にいたっては、必要性はわかるが“できない・暇がない・方法がわからない”と及び腰だったのではないのでしょうか。かくいう私も腰が引けましたが、病院は患者の栄養管理をするのが当たり前という時代の要求は理解していました。

病院1年目で周りは知らない業種ばかりでしたが、力強い味方である安保副院長が根回ししてくれた道具やスタッフで『井戸掘り』作業開始です。木村さんや医師、看護師、薬剤師、検査技師、栄養士で掘った井戸は、だんだん井戸らしくなり、八戸市民病院の澤副院長を迎えて講演会を開催した時のアンケートに「県病もやっとNST稼働。期待しています。」という声に、やっと水脈を見つけたと思いました。

軌道に乗った21年度、院内会議の席上、安保副院長から「栄養管理部も入院患者の栄養管理をするようになってきました。今までとは違います。」と紹介され、大変うれしくなりました。

今では嚙下チームまで加わり、調理師まで動員して食事の改善につながってきています。

これからもNSTという井戸のきれいな水を保つために、定期検査と補修とを皆さんで力をあわせて維持していくことを期待しています。

編集後記

ころころと変動する天気、寒暖の差に、皆様体調お変わりありませんでしょうか?

ちなみに私は、この天気の変動に身体がついて行けず、先日体調を崩してしまいました。(泣)

1月の豪雪で雪かきに疲れ果て、「なんぼ、雪降るんだ。いつまで続くんだ?」と思っていたら、2月に入った途端に豪雪の後陰もなく春の陽気が……。「もう春になるんでないか?」と思っていたら、3月に入った途端にまた、真冬に逆戻り…。まだまだ、春は遠いんだべが〜。

青森の桜の開花は、4月25日頃と予想されているようです。あと1ヶ月我慢すれば、暖かい春がやってくるな〜。

さあ皆様、体調に気をつけてあと少しの寒い時期を乗り越え、暖かい春を元気に迎えましょう〜。

(編集委員 H. S.)

青森県立中央病院のマークが決まりました

よろしく
お願いします♪



青森県のマークに、県病が行っている地域との連携による医療を表現しました。周りの星は、無限の可能性に向かい一丸となって前進する6つの圏域を表し、真ん中の星は核となる県病を意味しています。

発行所 青森市東造道2丁目1番1号

青森県立中央病院

ホームページ <http://aomori-kenbyo.jp>